

枕詞に終わらせないために

—いま、私たちはなにをしなければならないか—

全国精神保健福祉連絡協議会

会長 吉川 武彦

2011年3月11日、わが国に未曾有の危難が降りかかった。それは東日本大震災という言葉で語られるものであるが、それはこの地震災害によってもたらされたさまざまな被害を受けた岩手県、宮城県、福島県の3県のみならず、まさにわが国が被った危難であると認識すべきであり、私たちはそれをどのように切り抜けるかがいま問われていると考えるべきである。もとよりこの災害を直接受けた地域や人々に対して深い哀悼の意を表することは重要であるが、それが何かにつけて「枕詞（まくらことば）」のようにいわれるだけであれば、もうそろそろその言葉をやめなければならない時期にきている。大切なことは「いま、私たちはなにをしなければならないか」であろう。

地震や津波による直接の被害を被った地域や人々へ、いま、私たちはなにをしなければならないのであろうか。被災地や被災者の現状を私たちは直視しているのであろうか。その多くの被災地は、これを書いているいま、まさに雪のなかにある。仮設住宅で過ごす方々も数多くいる。いえ、避難して被災地を離れた方もいよう。この冬はことのほか雪が多い。風も冷たい。そのなかで被災地はどのように住民を守っているのであろうか、その住民は日々をどう過ごしておられるのか。なかでもさまざまなハンディキャップを負った方々は、どうしておられるのか。高齢者は、知的障害者は、精神障害者は、身体障害者はどのような支援を受けて生活しておられるのだろうか。

私は、縁あっていま長野市にある大学に勤務しているが、この大学はこのたびの東日本大震災の被災者を支援するべく教職員と学生が一丸となって岩手県大槌町に出かけ、校庭一面に転がる瓦礫や石ころを拾い、仮設住宅にひっそりとしている高齢者に声をかけ、こういふときだからこそ花壇を整備し、また子どもたちを集めて遅れている学習を補ってきた。その大槌町の子どもたちがこの3月には長野市に来て遅れた学習に取り組むことになっている。私たちはその学習のお手伝いをする。この子どもたちの中で長野市を訪れたことのある子はまずいないであろう。それだけに彼らを迎える私たちは、遅れた学習を取り戻すためにこの子らとつきあうというのではなく、ここで新たな体験を積みこれからの社会に大きく寄与してもらおうことを願って、私たちはこの子らを迎えたいと考えている。

支援にはピンポイントのものもあるがリニアールなものもある。線路には終点があるように支援にも終点がある。線路に無数の分岐があるように、支援にも無数の分岐がなければならぬだろう。ピンポイントの支援はそれなりに意味もあり、その支援によって支えることが出来る性質のものもある。時間をかけて支援をしていくとしてもその内容は分岐によってはさまざまになろう。福島原発事故のようにこの地震や津波によってもたらされ

たとばかりいえない事故もこのたびの災害に加わっている。1999年9月に茨城県東海村に起きた「臨界事故」以来、原子力発電所における事故と深く関わってきた私にとっても、このたびの福島原発事故を通じて新たに学ぶことは多かった。これからは各方面で検証が行われるであろうが、住民の不安をどのように受け止め住民の安心と安全を確保しようとしたかも検討されなければならない。メンタルヘルス関係者としてそこにも目を向けつつ東日本大震災の検証に深い関心を寄せて欲しいと思っている。全国精神保健福祉連絡協議会は4月1日をもって一般社団法人となる。この協議会にも、なにをしなければならぬかが問われている。

2012年2月

(清泉女学院大学／学長・清泉女学院短期大学／学長)